

講演概要

「認知症にどう立ち向かうか」

西村 正樹 （法人理事、研究所医療医学部門主任研究員）公立八鹿病院院長、滋賀医科大学名誉教授）

認知症を医学的に克服することは高齢化社会における喫緊の重要課題です。認知症の原因のうち7割を占めるのはアルツハイマー病であり、その病態は脳内へのアミロイドβと呼ばれるタンパク質の沈着であることが明らかになっていますが、それに対する根治的な治療の開発は長らくの懸案でした。そのような中、本邦でもようやく昨年、アミロイドβ抗体薬が初めての疾患修飾薬として臨床応用できることになりました。しかし、その効果は認知症を治す、あるいは進行を止めるというまでには至っていません。この現状の中、発症予防に向けた医学的、社会的取り組みが重要性を増しています。これまでの疫学研究から、認知症の危険因子は数多くあることが明らかにされ、そこには生活習慣や身近な慢性疾患が含まれます。また、社会的孤立が大きな要因になることも明らかになり、趣味や地域活動への参加が対策として有効であることが強調されてきました。とくに、高齢化率が高く、医療リソースが限られる地域医療の中で、認知症対策をどう進めるのかは切実な問題です。この講演では、最先端医療の実現と発症リスクに關与する社会的要因からの介入、すなわち医学的処方と社会的処方からの認知症予防への取り組みとその有用性について概説しました。